



中村俊定文庫  
文庫 18  
122  
1





芭蕉翁終焉記

と水やのなるをちかから重くおれを  
酒りこしし泉石冷くそ向納涼の  
地をふらに湿氣をきけくおを移す  
出次頼ちかけたり社をまわり引ひき  
流る腸をすくむをりこもむくもあ  
てお音のりねをむとせきを閉塞し  
けりくちをあらしくも便をく立ぬ

古尾



今年孰中を喪なりと歎あへり抑  
此翁孤獨貧病ありと徳業ありとあは  
まは量なりと二千餘人の口糸を  
ひらつと合にありと縁との不可思  
議ありとも勘破りいへり天和  
年の久深川の急流急火の如き  
激しひらり宮をうつよと燈の  
生のいん是て玉の結のそと  
ねま初

りくあはれ如火宅の変を悟り無所  
住の心をあはれも其次の身更のま  
甲斐の根幹なりとていへりまの  
つをなかりとていへりまの  
無我なりとていへり昔の徳を  
いへり人なりとていへり焼  
房をいへり心ありとていへり  
あはれなりとていへり芭蕉を  
植へり雨中吟

芭蕉世分りて盗するも是は其の如く  
傳ふるに堪困の友志けくうのひも  
ちのつゝ芭蕉をよめよめみよめ  
成せよの此圓覺も大巖和尚より  
易ありけりかゝるゝもよるゝも  
はるゝ或時翁の如卦の三みん  
年月時日を古曆の合せて筮考せり  
多かる華としの卦のありは是れ一

そこの爲る風を吹き雨も志ほきて  
うもゆるは教を志けく成りて今  
つ道なくかりて世の事は其の如く  
しらざるもあつたかよみよめ  
潜なるんをすもよるゝも  
るゝもよるゝもよるゝも  
信に聖典の瑞を感じたるは  
こゝの妙なるありたるを志す

結尾

ゆるきかりとほもかきまも慰むる所  
 ぼくらの橋を舟を林あり塔ありもの  
 空を澄みと眺むる浅きうや眼前の奇  
 景も推してくちのくちをうりおも  
 ありありとほきと定むる聊志とほし  
 る事うとて貞享初のころの秋知利  
 ちとまきひと和気やよし眺の奥を  
 心りこと次ありとくころもようよせ

おあつとやきうくのなる茶の  
 羽織ひの糸笠よあんひまよふまや  
 あつと風狂してこちをうりおも  
 魚多く鄙のち海をうりおもく名越  
 と向き悲あよと寄うとんはあしつと隠せ  
 うあつと月を竹舟みゆらふと風乃  
 吹りと程し徳川とこちの所と作  
 おつと近在隣脚と馬路をせと

十ありちりふるもせんは心をもりも  
 只一日もぬらうをねま心氣しつー  
 衰減して病層のこも田みありて旅ひ  
 とらるゝとまん其あやうと津宿所の人  
 いとさうゆゑ幻住菴 後菴子記 義仲寺  
 おく所至る処の風景を心の物のり  
 遊へるも年ちり元来混本寺佛頂和尚  
 下嗣法といひり并禪入はゆといひ

一氣鉄鑄生ナスいふはひさうも老力  
 くのぼりすあゝ句毎のこゝも姿ま  
 も自然く山家集の骨髓をばめ  
 めくもやばねをこゝの杜子美と  
 五つをわいし貧交人の厚く喫茶の舎  
 盟ふたうと宗鑑の酒あも散りひ  
 ういゝ成る自由躰放狂肺世拳つ  
 ロウアトせしも現力之九篤實のちあ

風雅の妙もく白いゆみもくもた極  
 流き雪もくもくはるかる活るゆたの血  
 流る島のゆたの林を引るもくもく  
 子ゆくもくゆたゆたもくもく兼好二ん  
 西ゆ高野もく兼好二ん縁ハ宗祇  
 宗長白川もく兼好二ん縁ハ宗祇  
 妙人あもくもく色蕉翁あもくもく  
 せえゆもくもくもくもくもくもくもく

人よすあもくもくあもくもく筆流る保あり  
 ともくもくもくもくもくもくもくもく  
 九月廿△△膳所の曲翠もくもくもくもく  
 ら流るもくもくもくもくもくもくもく  
 の昏もくもくもくもくもくもくもくもく  
 伊賀山の嵐紙帳もくもくもくもくもく  
 菌カキの塊積ツカエもくもくもくもくもくもくもく  
 けあもくもく例の葉もくもくもくもくもく

世月晦の夜より床よりのあき泄痢度  
 志げくし物いふ力も多し手足氷の如きは  
 あら物さへいひあはれしくしの中より去来  
 来より弛くるる膳所より正安の古傳  
 たり本節に別丈州平田の李由つみ点し  
 あり各惟縁と見せしむる新太をもはれあ  
 せゆるるそのころも心神の散乱ありあり  
 しかば不祥をこころしくしと述べても招

のまはれしこの相に片くはるる多し壁を  
 履しゆく念運をける志お身も入ける  
 みや心弱おゆあめさるるさるる

旅中病にうつら枯骨をいけしむる

あり枯骨をいけしむる心もせむしやと  
 尸をけりしはしるも奇執ありしは難し  
 上より死ん事のたを切ら思ふくも悔み  
 し八日の夜め所し各もねくきし



賀會祈禱の句

落つるやうくもあつて秋集り木節  
 風の元元あまきや露のあまき 去来  
 足り海よ竹の梅やみそさかい 惟然  
 初雪よまきこしありん佐古の宮 正秀  
 沖のまきおとや雲のうせ 之道  
 飛よしらしきつよより春れ良 伽香  
 託より屯も崎よ湯屋が 支考  
 あはれは保るまきこし春節を 吞舟

峠と此野のさなりや流さけん 文州  
 日あけしとんや流るるの菊し列

是と生并の笑納りく木節り葉を死と  
 ぬきあつてとねるの實こくしあつる  
 汗をぬきつて望野のしすけとけりもの  
 天舟よ含羅こしねらと道り雲しつてあ  
 ねく切子心しとささこし入るあつてけり  
 川あつて他あつてとささこし介抱の辰

一のよきもいれども縁よのふきと師を  
 つまやうつよの悦みあうもわうのせいの  
 あやけとなきいふより大にもさうりつ  
 者うとういひく麻の衣の垢つまらざるを恨  
 んてよふかきとあう眠りにあのを長るる  
 ばねもそと錦錆のましくふきをせとこのを  
 るるも門葉のむれともの面目をう九日  
 十日のふたにうきく其角 和泉の

府治の輪とつあうううまういふふう  
 しつとあうききききききききききき  
 らあういひききききききききききき  
 むういひききききききききききき  
 亀のあひうら船あけおの浦のうく海  
 堀とあうと十一日つた大坂中着て何  
 心をくちききききききききききき  
 あるるれどかあうあういひきききき  
 胸

けちよとくけけけ病床さうくひさの  
 いんくあふ懐<sup>フモヒ</sup>ちのへかろふよ色う向を  
 かくくうり色年くらの深志の通く  
 住吉の邦のくまのあふちを新衣守わの  
 のうももれつううらむくもるくく世  
 思ひうくは蟻通の物とくちあふも  
 むくく是侍くくくく洞きよあけく  
 うつくまりたる色ちあふ考う町くくくよ

方ゆくゆく退りく奇味の心をあきら  
 膝ちゆもて病顔をみくくくあふもる  
 かくて死死期も定ちかへくくくく

吹井くく病を招くん何るうな 晋子  
 と行控くくをくくくくくくくく推の  
 あまわうくくあしし幻住庵くくく世は遠  
 木曾殿と塚をちくくくくくくあふも  
 けのくくくくくくくくくくくくく

日月の光を射すまはるるに常よとふ  
世向よものあつちあ表よ思ふとらけく  
此後のはおもなりとてれけりあまし  
なま茶をけくしるすかのものよ寝を  
てして原中なり

うつくま茶の下乃 笑とみ 夫州  
病中のあまりすくすく 去来  
川流てくく人々 笑ひ声 惟也  
志くくきて次のるく出る 寒さゆ 支考

あひふあはゆとふし 正秀  
園とて茶飯あつはる 木節  
皆みとみあひく 寒くひるはし 列

十二日の申此刻くくく死部くく何く  
睦ゆるをてて物やうけあひさく  
も櫃み入くあまの用のやうに  
らく川舟あつちのせ去来し 列夫州と考  
惟然正秀の市節 吞舟あまの次く 列

予よものよ十人皆もろま下袖寒よの猿の  
 下とちをさるひひよとほまことたりとあふ  
 夢の跡きうよあまは生輝祿名らりやうか  
 年くら日比のあめりーよ初らつあーよ  
 教をわらひあーし御潜の光をさしあひ  
 けらるもー思ひ志のしるんか名れと慕へゆ  
 昔河らりか今ららるーつ東南西北め招  
 うねらつるの栖を定ちるゆかのさーや

真松島越の白山ちくちく下とあててく  
 をあつてしつて驚くはらうの歌あはたよ  
 下はもろひくあまののゆをらあまこ  
 あまらこしけちよあまら門人の思ららる  
 をやとさるらちちほをかこつて伏見や  
 けくやーみらる義仲寺ありわて葬  
 礼弟信をさるー京大坂古歸信所の  
 連気指をた者とりも此のの憶を慕

魚のこゝろは向うはるふ池あるそのこ  
 百余人し澤衣るのか智月とし列の寺  
 ついさう著せまのしん則長仲寺の  
 直愚上人をけちひようし門おのり  
 引入ら所まののよく木号塚乃右め  
 ありるさうまのいおまのうのうあり  
 まる柳もさうめての墓れらまうあり  
 やそのまのまの卯塔をまのひあへ垣を

老先み秋のくを極く名のうを  
 作常よ風景をこのる癖ちうくを  
 所らあう山田上山をうめてる所も  
 ちあふのせ溝ある舟も記念の記を  
 のく樵の麻田家の雁遺骨を池  
 上の月みさうしてうりちあう翁  
 ありく七日う程らありくあり  
 追善の息なり幸ああるハ予しくと

くろあけあまを合感して愚うく一紙  
季の紙を残りたるを紙とほりて  
のつては我翁を忘るる人望は是を  
回向乃多うりて

於栗津義仲寺牌位下 晋子書

元禄七年十月十八日 於義仲寺

追善之誦讚

晋子

あふりうを笠子隠る杖を毛  
温石はちうへる市を  
以竹のわらうとくむ海山を  
てまゝある土の縁を  
つみ換へ市の古を北を  
はつたてりぬ夕を乃を  
森の名をわのちうへる月の

惟

木節

李由

之道





昔よるる娘をねたのりん 野童  
 一衣のそまつむ花を痛せり 素聲  
 糸の多きく糸 酒 万里  
 酒の思のかけ 歌 志失り 識々  
 藪くあまうく 雀さる 雀 這萃  
 塩賣のつらつらある 世 筒 許六  
 力のぬりくみけ 志あふ 細 田鳧  
 新よは 雀さる 雀さる 雀 荒雀  
 くはさる 雀さる 雀さる 楚江

小屏風の内より 雀さる 雀さる 野明  
 四つよるる雀さる 雀さる 雀さる 風国  
 福ん丁より 草鞋 雀さる 雀さる 木枝  
 かく 堂みして 雀さる 雀さる 雀さる 晋子  
 ひららちも 侍氣みいおき 雀さる 雀さる 角上  
 あらうくと 雀さる 雀さる 雀さる 之道  
 あはれと 雀さる 雀さる 雀さる 云来  
 梳りく 雀さる 雀さる 雀さる 土芳  
 春くく 雀さる 雀さる 雀さる 芝柏

ぬらんをききし 知れぬお 卧高  
 才子みそし 持のふをまひ 尚白  
 月こし 切る門の弁乃 垢離 昌房  
 新の翁 蓬ぬるるる 丹野  
 世らの 新志まりを 大元 丈艸  
 花のそし ちと あり 旅々を 惟然  
 煮に 粥くらり ちの川 三 天椿  
 小休 ぬる ちと 遊 壱乃上 正秀  
 流 澄く 出る川へ 是 法石 西島

日ありし 葉の 並ぬ ちと 色 扑吹  
 袋の 猫お もら ちと 色 角上  
 里と 八や じん 遠 木 家の 寺 泥足  
 ちと ちと ちと ちと 刻 ちと 尚白  
 七つ ちと ちと 出 ちと 舟 ちと 形 卓袋  
 二季 ちと ちと ちと ちと 圃 ちと ちと 掛 芝 相  
 内 ちと ちと ちと ちと ちと ちと 探 芝  
 ちと ちと ちと ちと ちと ちと 遊 刀  
 け 牛 ちと ちと ちと ちと 月 ちと ちと 楚 江

結

木

小舟の地の丸くあつて名を舟魚光  
 社は五帝十帝立たるる晋子  
 祈くともく代交紙殿 風國  
 赤<sup>エウ</sup> 溢る氷上情を引けけく 文考  
 乳母と隣く送る啼児 正秀  
 獅子舞の拍子あけある昼下り 丈艸  
 雨氣乃を千尾でくし 昌房  
 在<sup>エウ</sup> 祈く普所の普法を在<sup>エウ</sup> 即高  
 行所出くは 畠新 田 之道

多<sup>エウ</sup> 片のは合はるる昏の光 吉来  
 木像のまを傍子をゆるくは 泥足  
 エ<sup>エウ</sup> まくは母あつて斗白くは 尚白  
 花袋のまをかふる名は 卓袋  
 漣<sup>エウ</sup> 我まのまを天の天 角上  
 経<sup>エウ</sup> よむくはも高のま聖靈 牝玄  
 か<sup>エウ</sup> ろくは花をる人負は珠 土芳  
 村<sup>エウ</sup> ろりらるは伊勢講の種 芝柏  
 各  
 暇<sup>エウ</sup> あまはるは小舞のあま 加減 這萃

軍とてかきとて祀又かき物 卧高  
 淵を彫りて陸壇の上を色るて 音子  
 新日あはれふて念珠押もむ 正秀  
 炎くの道はづらん在著寒く 文考  
 こそすれく替々大小の額 魚光  
 味あつきのゆゆか力をわくせ 楚江  
 かみ華一の何り可突下 游刀  
 ちりちり恨み砂をさりたり 風國  
 新赤くゆるるる酒の碎 之道

白鳥の陰を葛を子孫せりけ 採芝  
 之河あかりハ天下一 去来  
 飯をわく内気もゆるるる丹 尚白  
 叩者より積をみえもく北 回危  
 うら寒く塙格子の窓ゆき 芝相  
 文庫をあらは 拙山伏 土芳  
 ほろもあてて五月の目のもさ 惟徳  
 海くも色く北庫川のあり 夫艸  
 寮あたる外より鎖をうけ 北玄

思く久々の懐の奥に戒名 文考  
青天よちるさうくむのうらさく 去来  
巢にけしきさうく千里学 正秀

七回十人満座真行大津膳所  
京嵯峨掛津伊賀之連衆也各  
感愁眉而不求巧言也

傷七師終集作句 初七日迄

志せほ色さるも十世の泪うふ 京玄珠  
啼うちの相氣をらめせ涙徳 傷李由  
そは下嵐も寒ふととちう 大津水音  
つわりの宗紙も寸白紙の表 日し列  
りあもも泪を先か塚の表 膳本昌房  
霞の墓をゆるかあを殺あ 僧丈州  
了んひの誓りもあといん帰む 去後許太  
用とてみさる徳の舟あらん 同波村

墓もより十もあふせのくねり ぞ探芝  
 和席も端もあふやねの糸 大津蓮江  
 ぬくも着の老の髪 聖因成夷  
 木も掃やあふる月影の上 大つ橋  
 日影もに塚もくねりやねあふ 日あ玉  
 白雪もあふゆやや笈の脚 傍千那  
 志け縮子紙子あふゆねあふ 大つ尚白  
 了を翁の跡もあふゆねあふ 奥羽塞をうら  
 んくあふの呈書もあふゆねあふゆねあふ  
 くらうてあふゆねあふゆねあふゆねあふ  
 遠懐のあふゆねあふゆねあふゆねあふ

中へくを回家河向もあふ糸 京撤士  
 とせぬもあふ糸と春も色ゆねあふ 傍角上  
 法法のをくけてもん墓の糸 京野童  
 一あゆもあふ位なるせんゆねあふ 月風国  
 身もあふ色もあふゆねあふゆねあふ 伊豆喜方  
 悲しきもあふゆねあふゆねあふゆねあふ 日卓袋  
 我もあふ色もあふゆねあふゆねあふゆねあふ 大坂之石  
 石もあふ墓もあふゆねあふゆねあふゆねあふ 日芝拍  
 藤のゆもあふゆねあふゆねあふゆねあふ 傍支考

八月廿日比の敷奈の歌歌 京春沈

十六日音子を幻住庵平とものみ  
あつてゆくを新とていふ権の由を  
いふ事こそよく平付をさるるを  
世なり

あつてしや何を力あつてすと 曲翠

縁おつてあはれ色つてむおれ世 正秀

うりくさひさすもさるもあはれ 卧高

縁ちてみるおの岩とみあはれ 泥足

見送りし房の姿や袖のよめ 霊椿

おむりしも何れおのあはれは 音子

丸つてん何もうさー 枝柳 燒峨神歌

線まの煙霧のや枯色蕉 月荒雀

ゆらぎの千もも啼や塚の塚 大坂春舟

を芭蕉衣のよけて 泪うま ぞ魚光

立うのし神もーくや墓のお 日回鳥

悔まおつて無念ふあつてあつて 日游刀

まほつてはる廣くおの山 日朴吹

本多もあつてゆれとるいふはるあは 太末枝

らねお目をとるはるあはれは ぞ這華

けしげのゆゑをさけり土の姿 大は土竜  
 ちり除へもろふや松のぬきふ ぢと遊を  
 ちりしんをひいてえとる塚の表 日伴九  
 依りけりて涙みあらすはるば 卯や女

二七日廟参之悼句所々文通

吾らわく徳の光やわが山 念ふ  
 小枝産やあつま白ひのあつら 尺草  
 みみの目も師よなまのるもふく 大坂か柿  
 けりや悲しきうく柳の ぢと北寄

間逢ふあてあつる舎や村ゆゑ 日吾我  
 木の葉えと世の形やしのみ笠 日松泉  
 びりえとるあみきん丸ひ巾 日朔巫  
 菊極嘆え記りし馳走りふ 望国裕睦  
 朝日けりて表もあつての塚のあ 日重氏  
 赤くけりて指さきあつる目うふ 女素聲  
 ちりしんをひいてえとる塚の表 女万里  
 花もろせりほをさしてあみきん 東の惟松  
 軒桶のあつるあつるあつるのあ 女可南



みの月 濤あうけしる 洞あ ぢ 徹房  
 くらうつけをまねもゆき 如月ち 日 麻三  
 木急の目もも候のしつね 日 砂上  
 力そく 墓うけしつね 時あふ 日 蚤鳥  
 糸柳りねく 名くう 秋川 日 向震新  
 持おししもの 秋あや竹の表 日 さ来儿  
 みあつてんてりあ のあつね 日 小倉雨文  
 幻のあひるを 括母の 橋 日 さ乃有  
 力あふ 獅のあがきやを 牝母 日 表根木守

新あやあふししう 秋 日 みの知行  
 くらあふあふあふのあふ 日 讃とうり  
 くらあふあふあふのあふ 日 聖田小作  
 大根りあふししう 日 京其木

之七日伊賀連流追悼句

時あふあ 柳しつねゆい 日 後堂玄鹿  
 其のあふあ 日 梅りな 日 山岸車来  
 けく 運走も 日 色括母 日 浅井凡睦  
 寒あふあ 日 けの膳 日 の朝 日 山田雪芝

三つみへう啼てるぬのくほひ鴨 杉並肥力  
 六つさくく足跡たけりりその月 尾本喜蘇  
 おろけ戸洞のあはれおの業 中野  
 中野うらなぬのけづを洞りな 多摩  
 なまねかへりあてしるる古障子 依治洞木  
 手向や二何をこれら菊島 西沢魚目  
 伴や足もこれ女垂虫地 明子  
 多る種のをあへんたけり 岸陽和  
 山茶むの敷ねく色うきせお 本吉枝峯

情急つるあやもちうら丸印市 大塚  
 りら木島の果や木葉の吹たけり 猿雖  
 芭蕉く枯葉く神のくま 小南風  
 赤衣の小志ぼく厚むちあ 桂田示峰  
 つしをを菰の仕あゆのあ 井上  
 赤葉のくくのまや洞のく 演式  
 何のくもあ 中尾標市  
 菊 十重  
 ちやうりなや風もくを枯柳 伊五萩子

栴多子新入る時 男麻呂ふ 糸田木  
 笠手返時多きつゝ 小南 井つぐ  
 一のまのくちをさしむ 山形 らむ  
 すまうてきと嘆く 山形 大保仙杖  
 歌く一の曲もあふや 水石む 松本氷固  
 水石の遠よわねや 協の果 内神九節  
乃めくくのわ脚 粟津 乃ろろ  
亡師のま言 乃ろろ  
 乃ろろとや 活らる文字の村衛 岸半残  
 乃ろろん茶の末も 喉神の下 西の百歳

恨あま〜 乃ろろや 敬おふ 浦あ  
 乃ろろと 母れ世の乃ろろ 来川鳥栗  
四七日をろろ〜 普音文通之句  
 乃ろろ乃神の乃ろろ 伊豆新州  
 乃ろろ乃ろろ乃ろろ 日園友  
 乃ろろ乃ろろ乃ろろ 日定芽  
 乃ろろ乃ろろ乃ろろ 日宗比  
 乃ろろ乃ろろ乃ろろ 日斗從  
 乃ろろ乃ろろ乃ろろ 日芦本

吉尾

十三

御う合うとらゆき悲しよき水は い七援不  
せらうとの笠をえんあれ笠 日産牧  
取の底子水鏡のこみりの 尾列お川  
梅川如 一羽をえんあれ 日素染  
雲のちりて光るうい物舟 日九次  
ふつふつとあま紫をくこ堰の揃 水号  
ゆき晴あめの日影をわがをぬ 大坂御香  
持銅又し川邊もゆる月か みの低耳  
文基を平し去ぬ新し古の巾 伊与黄山

上終

